

平成21年 5月 12日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520192

研究課題名（和文）インド系英語作家による自伝的小説の比較研究

研究課題名（英文） Comparative Study of the Autobiographical Novel and Indian Authors

研究代表者 赤岩 隆 (Takashi Akaiwa)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：60184066

研究成果の概要：いわゆるインド系の英語作家の作品に、自伝的な作品が多いことに着目し、その理由について、具体的な作品に当たりながら、また、自伝というジャンル全般について考察を深めながら、研究した。その範囲は広く、したがって、いまだ道半ばであるが、「小説の全体性」という、次に繋がる研究のキーワードを発見した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	0	1,700,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	540,000	4,040,000

研究分野：英語圏文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：自伝、テキスト、インド的、自伝的、全体性、ノンフィクションの言語

1. 研究開始当初の背景

日々の研究生活のうちより、共同研究者2名は、インド系の英語作家の作品に、いわゆる自伝的な小説作品が著しく多いことに個々に気づいていた。それについて相互に意見を交換するうちに、そうした現象はただの偶然ではなく、現代かつインド的な深い意味合いをもっているのではないかという問題意識で一致し、共同研究の計画を立案するに到った。共同研究者両名は、イギリス小説、とりわけそのスタンダードを形成する18世紀及び19世紀のイギリス小説の研究を長年続けてきており、多年にわたるそれら研究の経験が、当研究計画の基盤になっているこ

とは、いまさら云うまでもない。

2. 研究の目的

当研究計画を学問分野的に言い表すならば、今日流行のポスト・コロニアル研究の一環ということになるのだろうが、共同研究者2名は、当研究計画をそうした既存の枠組みのうちで消化することを望まなかった。したがって、学問研究の流行に流されることなく、独自の研究成果を挙げることを、当初より第1の目的とした。そのために必要な研究の柱として、共同研究者2名は相互に話し合い、ふたつのキーワード、すなわち、「インド的」及び「自伝的」というふたつのキーワードを

立てることとした。それらふたつの方向から研究を進め、また、それぞれに年々の実績を積み上げてゆく。そのうえで、それら両方向からの研究を相互に接近させようとするならば、両者の研究は、必ずやいずれかの地点で自ずと出会うはずである。それが具体的にどのような地点になるか確認をめざした。以上が、当研究計画の目的の根本であるが、重要なのは、求める地点が、いわゆるポスト・コロニアリズムの研究が従来当たり前のものとして想定している種類のものとは異なるものになるだろうと当初より予想されたことである。その点、大いなる期待を抱きつつ、共同研究者2名は立案の具体化をさらに進め、そののち、詰められた計画に従いながら、順序よく個々の研究作業に入った。

3. 研究の方法

当研究計画の二本柱、すなわち、「インド的」と「自伝的」というふたつのキーワードによって示唆される研究領域のうち、前者については、西インド諸島を作品の舞台・背景とするインド系の英語作家たちに焦点を絞って、作業をはじめた。より具体的には、ふたりのナイポール、すなわち、V.S.ナイポールとシヴァ・ナイポールの諸作品に注目した。この兄弟は、西インド諸島の英語文学を代表するふたりであり、西インド諸島という枠組みを外してみても、その小説作品のレベルはきわめて高いものである。現に、兄のV.S.ナイポールは、1971年にはブッカー賞、続いて2001年にはノーベル賞を受賞しているし、兄ほどではないとしても、若くして逝った弟のシヴァ・ナイポールも、その遺した小説作品の質は、一流の名に恥じないものと認められて然るべきものである。この稀有の文学兄弟は、西インド諸島のひとつ、トリニダッドで生まれ育った。のちにそろってオックスフォードで学び、それぞれ旧宗主国であるイギリスとの結びつきを色濃く持ったふたりであるが、小説を書く際には、生まれ故郷であるトリニダッドを舞台とし、その場所においてインド系として生きることがどういうことであるか、具体的かつ執拗に、小説作品のうえで追求した。イギリスのかつての植民地であるトリニダッドといい、あるいは、さまざまな事情を抱えながらそこで暮らすインド系とはいうが、また、そうした事情やそれにより結果する日常については、文字どおり身をもって熟知したふたりであるが、小説の筆を執るまでは自明のこととしてきた自身あるいは同胞の存在それ自体を明らかにするとすれば、もっとも馴れ親しみ、外側のみならず、内面的にも、経験という形で機微を味わい尽くした自分自身、親族や一族、あるいは、もっとも直接的に関わりを持つコ

ミュニティにむかって、触手を伸ばそうとするのは当然の選択である。勢い、ふたりの書く小説作品が、色濃く「自伝的」になる所以であるが、ここに小規模ながら、当研究計画がふたつの柱とするキーワード、「インド的」と「自伝的」のふたつが、早くも重複し、あたかも合わせ鏡のごとくに相互を照射し合うことになる。すなわち、V.S.ナイポールとシヴァ・ナイポールのふたりが、トリニダッドにおいて「インド的」であることを問うことは、そのふるまいが真摯なものであればあるほど、「自伝的」なふるまいとなつてゆくというわけだが、その様子を逐一追うならば、「インド的」であることと、書くことが「自伝的」なふるまいにならざるを得ないこととのあいだには、世界中に散らばっている他のインド系英語作家にも全般的に通じるような本質や必然性、あるいは、インド系ならではの特殊性といったものが明らかにされるはずである。そのためには、インド系であること、あるいは、もっぱら自伝的作品を書いているか否かには関係なく、研究の対象となる作品が、ごく純粋に小説作品として優れたものと認められる必要があるが、この意味でも、V.S.ナイポールとシヴァ・ナイポールのふたりは、先にも指摘しておいたとおり、申し分のない資格を備えた作家、研究対象となる作品を世に問うた作家と云うことができる。ようするに、ふたりを軸に「インド的」並びに「自伝的」というコンセプト（あるいはヴィジョン）を具体化してゆくことは、その正当性及び成果の点で、最初から保証されているも同然と云えば、いささか自信過剰の言い過ぎになるかもしれないが、いっぽうにおいては、初手からその程度の保証が得られないようでは、どんな研究計画も成果は大して期待できないと云われたところで反論のしようもないだろうというのも否定できない一般的な事実である。とはいうものの、最初に述べたとおり、これはあくまでも、研究の半面、「インド的」というヴィジョンを具体化するためのものにすぎず、したがって、その過程での残る半面、「自伝的」というヴィジョンとの邂逅あるいは重複というものは、いまだ求めるものの真の深さを獲得してはいないだろう。当然のこと、それより以前には、V.S.ナイポールとシヴァ・ナイポールのふたりを通じて明らかになったことを、他のインド系作家に対して適用してみるという応用の作業を実施しなければならない。V.S.ナイポールとシヴァ・ナイポールのふたりを通じて明らかになったこととは、いうまでもなく、厳密にはふたりについてのみ云えることには違いない。同時に、一種逆説的な過程を経てではあるが、それゆえにこそ、ふたりについて指摘できることは、インド系の英語作家全般について通用することにもな

るのだろうか、それにしても、個々の作家のローカリティの突き合わせというものを経なければならぬ。すなわち、ふたりのナイポールをとりあえずの物差しとしながら、他のインド系英語作家とのあいだに認められる類似と相違を明らかにしてゆくわけであるが、類似にしる相違にしる、その都度深化してゆくのは、「インド的」と「自伝的」というふたつのヴィジョンの相互照射の有り様であり、あるいは、そうした相互照射の有り様の変化すなわち進展こそは、当研究計画の頼もしい証となるだろう。

最初に戻ろう。当研究計画のもうひとつの柱である「自伝的」というキーワードについては、なにより考え方の根本に戻ること目標にして、いわゆる「自伝」というジャンルそれ自体をとりあえずの研究対象とした。いうまでもなく、「自伝的」であることと、文字どおりの「自伝」とは、ある意味、似て非なるものであって当然だからである。作業は繁雑にはなるが、求める答えの精度を高めようとするならば、避けて通れない作業であると考えた。とはいうものの、「自伝」の範囲を無際限に広げるわけにはゆかない。それでは、どのように工夫してみたところで、物理的に無理がある。したがって、なんらかの基準に従い、限定する必要が出てくる。問題はその基準であるが、ひとつには、時代という意味から近代、ひとつには、原典に当たれるという理由から英語圏といった基準を設け、そうした縛りをかけたうえで、できる限りスタンダードに近いとみなすことのできる「自伝」を選ぶことにした。同時に、世界には、自伝論あるいは自伝研究というものがあることを鑑み、それらについても、収集と選別を行うこととした。これもまた、作業としては膨大であるが、それらがまさに玉石混淆の塊となっている以上、むざむざ放置はできない。一見、遠回りには違いない道程であるが、得るものがないわけではない。というのも、「自伝」と「自伝的」との相違とは、ごく大ざっぱに云って、ノンフィクションとフィクション、あるいは、それらをそれぞれに成り立たせているところの言語上の相違に違いなく、そして、両者のインターフェイスこそは、「インド的」か否かを問わず、「自伝的」小説について考えるうえでの、もっとも注目すべき第一等の要点となるべきはすなものだからである。もっといえば、両者は、ジャンルとしても言語としても、右と左と峻別できるような代物とはなっていない。当研究計画がいわゆる「自伝的」小説に拘る第一の理由がここにあるが、ようするに、重要なのは、どのように峻別できなくなるか、具体的にその有り様をできるだけ具体的な形で知ることであるが、以上のような見極めに基づき、当研究計画は、「自伝」の

スタンダードとして、ベンジャミン・フランクリンとチャールズ・チャプリンのふたりを、境界線上に位置する例として、トーマス・ド・クインシーとマーク・トウェインのふたりを中心に据えることにした。ある意味においては、「自伝」とは成功物語の謂いにほかならず、その意味からは、前者のふたりは典型的な例とみなし得るだろうし、したがって、それらの分析結果が教えるところには期待が持てるだろうし、他方、後者のふたりについても、いずれも一筋縄ではゆかない文章家ではあるが、かれらの「自伝」がフランクリンやチャプリンの「自伝」と比べれば、いわゆる成功物語からは程遠く、したがって、「自伝」が「自伝」であることから離れた場合、すなわち、ノンフィクションの言語がフィクションの言語へと限りなく接近した場合、どのような現象が生じるか、その具体像を探るにはもってこいの作家ということになるはずである。そのうえで、ごく一般的に「自伝的」と称される、いわば古典的な小説作品をめぐる独自の考察を配してゆく。それは、ひとつには、チャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』ということになるだろうし、ひとつには、ジェイムズ・ジョイスの『若き芸術家の肖像』や『ユリシーズ』ということになるだろう。まとめて云うならば、当研究計画の残る半面、すなわち、「自伝的」という言葉をキーワードとする研究とは、「自伝」と「自伝的作品」、ノンフィクションとフィクション、及び、それぞれの抱え持つ言語と云った、三つの対立が相互に浸透し合う立脚点をみつけることである。そのうえで、インド系の英語作家を取り上げる。と云って、図式的に当てはめるわけではない。そうではなくて、その作品が自ずと延長線上に位置するものかどうかについて確かめる。そのための作家として、サルマン・ルシュディに注目した。より具体的には、ルシュディの『真夜中の子供たち』を分析の対象として取り上げ、むしろ「自伝」とは関係なく、一個の作品としてどのように評価できるか、考えていった。その過程において生じる「自伝的」ということの意味、あるいは、ノンフィクションとフィクションの関係と云ったものこそ、意義あるものと考えたからである。当然予想されるように、もしもそれらが意義あるものと認められるならば、どんな人為的な操作を加える必要もなく、上記三つの対立の相互浸透する地点とも、ルシュディの『真夜中の子供たち』は、然るべく結びつきを持つはずであり、すなわち、そのようにして明白化する様態こそ、当研究計画の「自伝的」というキーワードからのアプローチの作業成果の精髓と呼ぶべきものになるはずである。同時に、その精髓とは、当研究計画のもうひとつの半面、すなわち「インド的」研究

からのゆきつく先ともなっているはずである。

4. 研究成果

上記詳述のとおり研究方法に基づき、当研究計画は、都合3年間にわたり、粛々と作業を進めた。共同研究である以上、共同研究者2名は、常時親密に連絡を取り合い、いっぽうは「インダ的」、いっぽうは「自伝的」というキーワードのもと進められる研究の進捗状況を確認し合い、助言を与え合った。成果の発表についても、当初より積極的に行ってゆくこととし、そうすることで、研究の過程が正しく進行しているかどうか、自己満足に陥らないよう心がけた。その場所として、ひとつには、共同研究者2名が長年主催してきたポスト・コロニアルの文学研究会を利用した。その研究会の充実を図るべく、外部よりこれとは思う講演者や研究発表者を招き、同時に、自身の発表を行った。他方、文書による研究発表も積極的に行い、鍵になると思われる論文については、とくに査読の付いた研究誌に投稿し成果を問うた。具体的には、下記の「主な発表論文等」のリストを参照してもらいたいが、ここでは、研究成果の全体の、具体的な内容について、まとめて報告しておく。

「インド系英語作家による自伝的小説の比較研究」という表題のもと、「インダ的」と「自伝的」というふたつのキーワードを軸に展開してきた双方向からの研究が自ずと出会ったのは、「全体小説」、あるいは、「小説の全体性」という言葉で総合できるような地点だった。これは、共同研究者2名とも予想だにできなかった結果であるが、それだけに悦ばしきものであるとも云えた。すなわち、それは、両名にとって「発見」だったということであり、この「発見」とは、いうまでもなく、当研究計画の過程をひとつのこらず果たしてこそ得られたものと云えるからである。ゆえに、当研究計画は、致し方なく計画年度を越えることにはなるが、この「発見」についても、成果のひとつとして、あるいは、次の研究計画に繋がる橋渡しとして、世の審判を仰ぐことにした。すなわち、2009年度の日本英文学会において、「小説の全体性」の表題のもと、シンポジウムを企画・実施することとした。場所柄、多くの研究者の出席を期待でき、同時に過去3年間の研究成果を問う場所としても最適なものとなるだろう。当研究計画においては、「インダ的」といい「自伝的」といい、盾の両面のように分けて作業を進めてきたが、事を総合するとしたらどうなるか、その答えが「小説の全体性」というキーワードにより示唆されるアプローチにほかならなかった。ある意味での「全体

小説」の実施、あるいは、「小説の全体性」の追求というものが、インド系英語作家による小説作品が「自伝的」になる理由であり、同時に、彼らの作品が「インダ的」であることの証ともなっていたのである。これが、当研究計画の、いわば行き着いた先である。とするならば、当然のこと、ここから次の研究計画が新たにはじめられるべきである。日本英文学会でのシンポジウムは、そのための絶好のスプリング・ボードとなるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計19件)

1 赤岩隆「アフリカ文学と Oral Literature(6):モダニティのゆくえ」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科)第26号、pp.1-14、2009、査読なし

2 赤岩隆「自伝のテキスト:フランクリンからルシュディに到る」『テキスト研究』第4号、pp.4-21、2008、査読あり

3 赤岩隆「『真夜中の子供たち』序論:インド発マジック・リアリズム」『LIBRA』、第8号、pp.23-56、2008、査読あり

4 赤岩隆「『草は歌っている』論:リアリズム再考」、『英語青年』2月号 pp.11-13、2008、査読あり

5 赤岩隆「アフリカ文学と Oral Literature(5):チュツオーラのモダニティ」『人文論叢』第25号、pp.33-46、2008、査読なし

6 赤岩隆「アフリカ文学と Oral Literature(4)—その後のヴァン・デル・ポストとブッシュマン」『人文論叢』第24号、pp.1-18、2007、査読なし

7 赤岩隆「短篇小説論(6)—いわゆるエッセイとの距離」『Philologia』37号、pp.61-80、2007、査読なし

8 赤岩隆「ボナパルト・ブレンキンズ」『英語青年』6月号、p.16、2007、査読あり

9 榎正行「シヴァ・ナイポールの『南の北』--ナイロビから」『中京大学教養論叢』48(2)、pp.340-358、2007、査読なし

10 榎正行「小説の三つの空間」中京大学教養論叢 48(2)、pp.360-384、2007、査読なし

11 梶正行「シヴァ・ナイポールの『潮干狩り』」
中京大学教養論叢 48(1)、pp.140-156、2007、
査読なし

12 梶正行「V・S・ナイポール--小説の終わり、
自伝の始まり」中京大学教養論叢 48(1)、
pp.98-138、2007、査読なし

13 梶正行「自伝の空白--V・S・ナイポールの
場合」中京大学教養論叢 48(4)、
pp.787-808、2007、査読なし

14 梶正行「ふたりの謎の男--V・S・ナイポー
ルのボガートとシヴァ・ナイポールのグリー
ン氏」中京大学教養論叢 48(3)、pp.587-636、
2007、査読なし

15 赤岩隆「オリーヴ・シュライナー序論—小
説と観念」『英語青年』第12号、pp.38-41.
2006、査読あり

16 赤岩隆「ラドヤード・キプリング論」学習
院大学人文科学研究『人文』第4号、
pp.145-163. 2006、査読あり

17 赤岩隆「『キム』論」神戸薬科大学『研究
論集 LIBRA』第7号、pp.1-27. 2006、査読
あり

18 梶正行「V・S・ナイポールの伝記的小説」
中京大学教養論叢 47(3)、pp.497-556、2006、
査読なし

19 梶正行「V・S・ナイポール：初めての雪」
中京大学教養論叢 47(4)、pp.785-824、2006、
査読なし

〔学会発表〕(計1件)

1 赤岩隆「アパルトヘイト下のインド系作家」
英語圏ポストコロニアル文学研究会、2008年
11月9日、中京大学

〔図書〕(計1件)

1 梶正行 (共著)『空間・人・移動:文学か
らの視線』、2006、勁草書房 180 ページ
(119-162)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤岩 隆 (Takashi Akaiwa)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：60184066

(2) 研究分担者

梶 正行 (Toga Masayuki)
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：10163958

(3) 連携研究者